

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	溝渕 園子
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 〈翻訳〉の文学誌—近現代の移動と文化表象に関する日露比較文学的研究—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	有元 伸子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	妹尾 好信	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	久保田 啓一	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	河西 英通	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	東京外国語大学 教授	柴田 勝二	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、明治から現代にいたる日本とロシアの文学における空間的・言語的な移動や相互の関係を、〈翻訳〉の観点から明らかにし、文学というシステムの再検討をはかった研究である。文学のグローバル化のなかで急速に進展する翻訳研究にあつて、本論文では「ポリシステム理論」を援用し、原語絶対主義的な文学観を相対化するとともに、言語移動に中心と周縁の緊張関係を見てとり、周縁におかれた作家・作品にも光を当てていく。</p> <p>論文は、序、6章19節からなる本論、結により構成される。</p> <p>「第一章 文学の翻訳から翻訳文学へ」では、明治39年の翻訳論、昭和20年代の太宰治のエッセイ、平成6年の村上春樹の小説をもとに、近現代文学における翻訳をめぐる問題の変遷を総覧する。</p> <p>「第二章 移動の文脈における〈翻訳者〉と文化翻訳」では、小山内薫と宮本百合子のロシア／ソ連外遊に際しての演劇論や紀行文を対象として、彼らが観たロシア演劇やモスクワ文化が日本の読者に向けて翻訳された様態を明らかにし、彼らが〈翻訳者〉という主体を生きていたと新しい観点から再評価する。</p> <p>「第三章 日露戦争前後の日本の翻訳文学」では、日本における最初のロシア文学翻訳ブーム期の翻訳作品（トルストイの2作品、チャーホフ「六号室」の瀬沼夏葉と馬場孤蝶による2種の翻訳など）を対象とし、原文と翻訳文との緻密な解析を通して、現代の翻訳論にも連なる複数の規範の機能を指摘する。本論文の中核をなす章の一つである。</p> <p>「第四章 日本文学のロシア語翻訳とロシア文学における日本人表象」では、旧ソ連における芥川龍之介文学、およびペレストロイカ前後の三島由紀夫の翻訳・紹介の状況を通して、日本文学がロシア文学の制度のなかに組み込まれていく様相を論じた。また、ソ連時代の長編歴史小説「オキヌさんの物語」を通じてロシアにおける〈日本〉〈日本人〉という文化表象の形成について考察する。</p> <p>「第五章 異文化表象と女性の周縁化」では、夏目漱石の小説「それから」、少女雑誌『少女界』、北原白秋らの紀行文の分析を精密に行った。日露戦争期前後に「恐露病」の文学モチーフが消費されるなど、文化表象としてのロシアは日本人のロシアに対する憧憬と嫌悪とを混淆させつつ形成され、そこに翻訳文学が介在することを明らかにした。</p>			

「第六章 翻訳の可能性と文学の越境性」では、夏目漱石「坊っちゃん」のロシア語訳のほか、水村美苗の小説や熊本の文学ミュージアムの分析を通して、〈翻訳〉からみた文学の未来の可能性について論じた。翻訳とは言語交通と闘争の場であり、翻訳不可能性の問題から逃れられない一方、種々の境界を可視化することにより、〈文学〉とそれ以外の文化領域との間を架橋する可能性を有していると述べる。

このように、本論文は、近現代の日露の文学言説を対象として、そこにみられる表象の転換や移動を広く〈翻訳〉行為として把握しようとする意欲的な研究である。扱われたのは、翻訳者の資質や表現の落差といった狭義の翻訳に関わる問題に留まらず、文学者のロシア旅行に際しての眼差しや、少女雑誌におけるロシア表象、芥川や三島のロシアにおける受容など、異文化との交差において生じる問題や世界文学市場にまで多岐にわたる。二葉亭四迷など、さらに論じるべき対象は残されているものの、日本とロシアの両文学・文化への卓越した知識と語学力をもとに、優れたテキスト分析と理論構築によって、日露比較文学と翻訳研究とを大きく前進させた論考として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)